様式第２号

平成２６年度　　独 創 的 研 究 助 成 費 実 績 報 告 書

平成２７年　　月　　日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td>保健福祉学科</td><td>職 名</td><td>准教授</td><td>氏 名</td><td>池田　隆英　　印</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="6">「子どもの理解と援助のフレームワーク」を活用したアクションリサーチ
－発達過程・生活場面に応じた新たな指導法の構築－</td></tr>
<tr><td>交付決定額</td><td colspan="6">400（千円）</td></tr>
<tr><td rowspan="5">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td>所属・職</td><td colspan="2">専門分野</td><td>役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>池田　隆英</td><td>保健福祉学科
准教授</td><td colspan="2">教育学、社会学</td><td>調査研究の企画、実施、分析、総括</td></tr>
<tr><td rowspan="4">分担者</td><td>楠本　恭之</td><td>岡山短期大学
准教授</td><td colspan="2">教育史学</td><td>実地調査の補助、実地調査の分析・考察</td></tr>
<tr><td>中原　朋生</td><td>川崎医療福祉短期大学
教授</td><td colspan="2">教育方法学</td><td>先行研究の整理・考察、実地調査の分析・考察</td></tr>
<tr><td>光田　尚美</td><td>近畿大学
講師</td><td colspan="2">教育哲学</td><td>先行研究の整理・考察、実地調査の分析・考察</td></tr>
<tr><td>岡田　典子</td><td>岡山大学
助教</td><td colspan="2">教育社会学</td><td>実地調査の補助、データの整理、報告書の編集</td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要</td><td colspan="6">本学特別研究助成費による「保育実践のフレームワークの基礎的研究」（平成23年度），「保育実践のフレームワークの理論的・実証的研究」（平成24年度），「子どもの理解と援助のフレームワーク」の汎用性・有用性の検討」（平成25年度）という一連の研究成果を踏まえ，今年度は，「子どもの理解と援助のフレームワーク」（以下，「フレームワーク」）を用いて保育・教育の調査を行った。
保育・教育の実践過程の研究は，研究者の個別の観点や実践者の個別の経験に基づく。その結果，実践過程を分析する「共通の枠組み」が構築される志向性が極めて薄く，実践が適切であると言える「実践の成立条件」を明示できていない。そのため，分析する際の「共通の枠組み」を構築し，「実践の成立条件」を実証的に検討する必要がある。一方，本研究は，保育・教育の実践過程を分析する「共通の枠組み」を提供し，「なぜ適切なのか」「なぜ成功なのか」といった「実践の成立条件」を明示できる。
こうした実践的な研究成果があることから，かねてから現場での行政指導や講演活動において，「フレームワーク」の研究の独創性が注目され始めていた。そのため，行政指導や講演活動の多くの依頼を受け，地域からの期待の声に応えるべく，本学の「地域貢献」の一環として活動を行ってきた。本年度は，こうした活動の延長として，保育学・教育学の根本的な課題の検討，子どもの生活場面のフィールドワーク，「子どもの理解と援助のシート」の開発，「保育・教育カンファレンス」の実施，という４つの活動を行った。なお，関係する教育委員会や担当課，幼稚園や保育所，小学校などの機関・施設の協力を得ることができ，当該機関・施設からの依頼のため交通費等の支出は最低限に抑えられた。</td></tr>
</table>

調査研究実績の概要	（１）保育学・教育学の根本的な課題の検討 従来の保育学や教育学は，心理学を基盤とする対象理解の研究と教科教育学を基盤とする指導内容の研究に分けられる。しかし，対象理解の枠組みは心理（内面）に偏り，子どもを総合的にとらえにくい。また，指導内容の枠組みは教科（内容）に偏り，子どもを主体的にとらえることは難しい。しかも，具体的な実践の過程に即して対象理解と指導内容を関連づける研究は，ほとんどない。保育学や教育学のこうした根本的な課題を検討するため，先行研究の文献を渉猟し，対象理解と指導内容を関連づける理論的な検討を行った。 （２）子どもの生活場面のフィールドワーク 一連の研究を踏まえ，対象児の年齢や学年，観察の時期や期間を加味して，生活の場面を可能な限り網羅した。観察の場面は，食事，排泄，習慣，運動，造形，歌唱，舞踊，観察，物語，自由遊び，など生活の場面であった。また，対象児の年齢や学年は，就学前（０～５歳）から就学後（主として小学校段階）までを対象とした。さらに，観察の時期や頻度は，学期ごとに，可能な限りの行事とその前後，対象の校園で複数回に行った。 （３）「子どもの理解と援助のリーフレット」の開発 「フレームワーク」は，就学前保育から就学後教育に至る実践者が子どもの理解・援助するための基本的な枠組みである。昨年の調査研究の活動，行政指導や講演活動などの実績から，「フレームワーク」が，これまでにない「指導法」の研究であることが，現場からの強い支持を集めている。そこで，質の高い資源を提供するため，岡山県下の関連する協議会や各園・校の協力を得て，「子どもの理解と援助のリーフレット」を開発した。 （４）「保育・教育カンファレンス」の実施 これまでも，本研究の知見の汎用性や有用性を検討するため，関連学会で発表を行うだけでなく，保育現場の方々からの意見を頂き，課題を明確にする作業を行ってきた。こうした理論的研究や実証的研究の成果として，本年度も，行政指導や講演活動，園内・校内の研修の依頼があり，全国保育士会での研修も行った。「フレームワーク」への注目度は高く，昨年の実績を踏まえて，本年度は「保育・教育カンファレンス」を実施した。 以上の調査研究の計画を実施することによって，保育・教育の実践過程において，合理的で明示的な意味を見出すことができ，研究者や実践者が実践の質的向上に向けた研修を行うなど，地域貢献の一助となった。また，保育者の専門性の向上は施策上の喫緊の課題であるが，「フレームワーク」の研究は，こうした課題に対応する基礎的なデータを提供することができ，本学の保育者養成課程の特色となりつつある。 　なお，来年度に向けて，中国地方，四国地方，九州地方の幼稚園や保育園，関係する機関（教育委員会や担当課）や関係する団体（社会福祉協議会）から，「フレームワーク」の紹介や「カンファレンス」の実施の依頼が来ている。こうした「調査研究に基づく活動」は，本学特別研究費（独創的研究助成費）を頂くことで成り立っており，対象となる校園，関係する機関・団体に実践的な資源を提供するだけでなく，本学の大学としての社会的評価を高めることに貢献している。

成果資料目録	冊子『子どもの理解と援助の「フレームワーク」－臨床的な保育のためのリーフレット』